



ふれあい班活動～みんなで最後の～



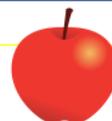
本校では、全校児童1年生から6年生まで縦割りにして班編成する「ふれあい班」があります。全部で24班あり、それぞれの人数が26, 27人となります。上級生からすると下級生に優しく教えたり、時にお手本になったりするような頑張る心が育ちます。下級生からすると、頼りになるお兄さん、お姉さんたちを信頼しながら学校生活を楽しみ、自分たちも学年が上がった時に同じように下学年の子の支えになるという心が育つということをねらっています。

日々の掃除、そして年間に数回企画される「ふれあい班活動」を行ってきました。

3学期に入り、この日の活動は6年生からバトンを受け継いだ5年生が主催する「ふれあい広場」がありました。24か所の場所に分かれて、楽しそうに活動していました。

6年生にとっては卒業も間近、下級生にとっては進級間近。こどもたちにとって思い出に残る時間になったと思います。交流をかみしめながら、学校中にたくさんの笑顔があふれる時間となりました。

落ちないリンゴの話～1. 2月のこの時期に



1月には大学入学センター試験がありました。毎年この時期、受験をむかえるこどもたちが必死で取り組みます。みんながんばれよと、なぜかドキドキしながら毎年応援しています。そんな受験期に、以前読んだ「落ちないリンゴ」の話を思い出しました。（「落ちないリンゴを売れ！」箱田忠昭）

今から30年ほど前、青森で収穫を前にしたリンゴが台風被害にあい、9割以上が落ちてしまったそうです。一生懸命に育てたリンゴたちが駄目になってしまったことに農家のみなさんは落胆し、そして収入も大幅に減ってしまったことに絶望したそうです。

しかしこの苦境をあるアイデアが救いました。それは、落ちなかった1割ほどのリンゴを「落ちないリンゴ」と名づけ縁起物として売ることでした。そうしたら普通ではありえない1個1000円の高値にも関わらず、受験生たちがたくさん買ってくれるなど飛ぶように売れ、完売したそうです。「落ちたリンゴ」にがっかりするだけではなく「落ちなかったリンゴ」「そこにあるリンゴ」にしっかりと目を向けること、視点を変えることによって活路を切り拓いたという話です。

この「落ちないリンゴ」の話は、子育てに通ずるものがあるかなと思います。

「こうなったらいいのにな」とか「こうならなくて残念」とないものねだりをして、つい人をうらやんだり、残念がったりする自分があるように思います。

自分の子育てを振り返ってみても「友だちの〇〇さんはできるのに我が子は出来ないな」と、他の子と比べてしまい、心無い言葉をかけて我が子をたくさん傷つけたことがあったと、申し訳なく思うこと多々あります。我が子の立ち位置を、親である私の価値観で勝手に決めつけ悲しい思いをさせてしまったことは、「落ちてしまったリンゴ」にしか目が向かず、嘆いているのと同じかなと思います。

我が子が持っている良さはなんだろう、何が得意でどんな力をもっているのだろうと、こどもを本当に愛してしっかりと見つめ向き合うこと、こどもに精いっぱい寄り添うことで、こどもたちは自己肯定感を高めながら、その可能性に挑戦し、持てる才能を伸ばせるのではと、この「落ちないリンゴ」の話から思いました。

忙しく過ごす日々の中で、なかなか難しいことかもしれませんが、こどもたちをたくさん愛しながらしっかり寄り添い、多面的にこどもたちを見つめられたらいいなと思っています。